

挟間の乳の観音

豊前市の挟間にはな、昔から大切にまつられているほとけ様があるそうじゃ。それはそれは大きな木の仏様でな、二メートルほどの楠の木にほられたすがたは、やさしい顔をなされた観音様じゃ。この観音様を『乳の観音様』というての、今でも地元の人はお花をそなえ大切におまつりをしているそうじゃ。

ところで、観音様の後ろには大きな岩かげがあつてなあ、そのすき間からほんの少し水が流れ落ちてゐる。今ではあちこちからたくさんの人がこの水をくみに来るんじゃが、それにはわけがあつての。今日はその話をするかいのう。

むかし、むかしのことじゃ。

このあたりにはたらき者の隆角というわかい百しようが住んじよつたんじゃ。そりゃ、朝も早から田畑に出て、作物をたくさん作りよつた。

村人たちが隆角を見るたびに

「早からせいが出るのう。よめさんはまだかの。」
と、一人でがんばっている隆角に、およめさんの話をしたそうじゃ。

そんな村人の世話で、ようやくとなり村のかわいいおよめ



さんとくらすようになった。そのよめさんもそりやようはたらきよってな、ますます隆角の田畑からはたくさんの作物が取れるようになったんじゃ。

やがて、隆角夫婦に、玉のような元気のよい男の子が生まれたんじゃ。夫婦はたいそうよろこんでいたんじゃが、こまったことに日がたつにつれて、母親の乳がだんだん出んようになってしまった。赤んぼうはいつもひもじいもんで、なくばかりじゃった。

そんなある日、隆角は今日も一人で田に出て仕事をしておった。しかし、このところ、夜なきする子のために、ぐっすりねむれない日々がつづき、あせ道でついついいねむりをしておった。どのくらい時間がたつたらうか、うとうととしていた隆角のゆめまぐらに白はつの老人が立つてな、隆角に呼びかけるそうじゃ。

「観音の左右にある岩かげにしたたる水をもって帰り、かゆをたき、これをいたただかばちちをうるべし。」
これだけ言うと、老人はすーっと消え去って行ったそうな。

目をさました隆角は、

「これは、観音様のおつげじゃ」

と思い、早速岩から流れる水をくんで帰り、かゆをたき、母親に食べさせた。するとどうだろう、たちまち母親の乳がたつぷ



りでてくるようになった。子どもはいきおいよくゴックンゴックンと息いきつく間まもなく飲んだこと、飲んだこと。おかげでそのばんは、夜よる起きてなくこともなく、隆角夫婦も、久ひさしぶりに安あん心しんして、赤あかんぼうといっしょにぐっすりねむることができたそうじゃ。それからというもの、隆角は毎日まいにちのように観音様におまいりをし、水をいただきかゆをたいたそうな。赤あかんぼうもすくすくと大きくなり親子おやこ三人幸さいわせにすごしたといふことじゃ。

それいらい、この話はなは口くちづたえにお乳ちちが少すくなくてこまっている人ひとたちにつたわり、観音様には多おほくの人がおまいりするようになったそうじゃ。人々はこの観音様を、『乳ちちの観音様』としてとうとび、今も水をくみに来る人ひとがたえんようそうじゃ。

(米村祥子)



乳の観音様